

フランス—アメリカの「新世界論争」

宇 京 頼 三

フランス—アメリカとは、国際舞台では、今でもことあるごとに対立的な関係として浮かび上がる。その「危険な関係」が両国の外交関係の歴史上どの辺りから発するのか、特定はしがたいが、ほぼ一八世紀末期、フランス革命以後であることは間違いないだろう。だが実は、その前触れとなるものがアメリカ独立以前の二八世紀前半にすでに見られるのである。

奇妙なことだが、啓蒙の世紀と言われるこの時代にフランスでは、新世界・新大陸に対するネガティブな考え方や感情が生じている。そしてこれが発展して「新世界論争」なるものが起こるのである。それも前述したように、フランス側では一八世紀博物学の泰斗であるビュフォン伯爵の博物学（自然誌）思想を中心にして、アメリカ側では第三代大頭領トマス・ジェファソンが相手である。

因みに、この「新世界論争」とは恐らく、一七世紀のフランスでボワローとペローの間で始まり、一八世紀にもフォントネルとフェヌロンなどによって蒸し返される文学上の「新旧論争」をもじったものであるだろうが、そう名付けたのはイタリア人哲学者クロチエの弟子の、アントネーロ・ジェルビなる思想史家であり、その著書に『新世界論争—ある論争の歴史（一七五〇—一九〇〇）』（一九五五年）があるという。

また付言すれば、最近（二〇〇五年）の Bill Marshall: France and Americas, Culture, Politics, and History とどう、いわば『フランス—アメリカ関係史百科事典』三巻本が出たが、これにはジェファソンの名はあっ

ても、ビュフォンの名はない。このアメリカ側から見た仏米関係史には、「新世界論争」の視点はなく、仏米関係の「有史以前」のことというのであろう。

さて、仏米の危険な関係の遠因ともなった、この新世界論争は一七五〇年頃に始まり、一七七〇—一七八〇年代にたけなわとなったものだが、これには二つの顕著な特徴があった。一つはまったく驚くべきことだが、この論争のもととなる反米的感情（この語はこの時期がまだアメリカ独立以前なので適切ではないが）、新大陸への否定的感情を表わす言説が啓蒙哲学の陣営から生まれ、隆盛したことである。それもこの言説が、名もなき思想家とか学者ではなく、啓蒙時代の「哲学的精神」を象徴し、その企てや進歩を高らかに謳い上げる人々によって提示され、普及したのである。つまり、ビュフォンやヴォルテール、レナール神父などが主役だったのだ。そしてそれがパリを中心として、やがてヨーロッパ中に広がり、一八世紀末には若いアメリカ共和国にはねかえって、仏米間の論争に発展することになる。

もう一つの特徴は、この論争が当初は科学的、もっと正確に言えば「博物学的」だったことである。例えば、アメリカ独立戦争でともに戦ったフランス人とアメリカ人が、ヴァージニアの湿度やペンシルヴァニアの土地の窒素濃度、小麦の生産高、入植者の出生率、新旧大陸の動物の

大きさ・進化などを巡って対立するのである。これが政治的、道徳的な問題となるのは一七八〇年以降のことである。

ここで注目すべきは、この論争が初期には「博物誌」が新たにしつつあった知、即ち地質学から動物学、植物学から人類学までの知に立脚しており、その先導役が博物学者ビュフォン伯爵だったことである。彼とその垂流の博物誌は記述よりも推論から始めるとか、記述そのものを例証にすると言われるが、誰一人大西洋を渡って現地調査を行なったわけではない。したがって、植物学にしても動物学にしても多種多様な「土着の産物」の目録など作成できるはずがなく、有名無名の先人の探険家や宣教師の旅行記や物語をもとにアメリカの自然を大ざっぱに描き、想像するだけだったのであろう。要するに、パリやベルリンの実験・研究室からアメリカを再発見したというわけだ。それも驚くべきことに、そうした産物の「劣性」とか「小ささ」のみが強調されるのである。そして当然のことながら、これがジェファソンなどの反論を呼ぶことになる。それにしても、この科学の黎明・勃興期、一種の科学ブームが起こったと言われる啓蒙時代になぜ「新世界論争」のような、今から見ればアナクロニクな現象が生じたのであろうか。その前にまず、この論争の中心的人物となるビュフォン伯爵とはいかなる人物なのか、今ではこの博物学者のことはあまり知られていないと思われるので、少し詳しく見ておこう。

周知のごとく、フランス一八世紀は啓蒙の世紀である。啓蒙とは文字通り、蒙を啓くことである。それは人間を無知や偏見、誤解や迷信から解放し、人間に新たな指針を示し、新たな確信を生み出す力を与える。王権が弱まりブルジョワジーが台頭するこの時代には、哲学や思想の面

のみならず、一七世紀の科学革命を受けて、科学においても蒙が啓かれ、著しい進展があった。つまり、一八世紀には、旧体制を破壊するフランス革命という社会的・政治的な大変動だけでなく、まさにこの混乱の時期にラヴォワジエ、ラグランジュ、ラプラスなどの偉大な科学者が化学、物理学、数学などの分野で大きな足跡を残している。またメートル法が制定され、度量衡が統一されたのもこの時代である。ビュフォン伯爵はそうした時代・社会に生きたのである。

因みに、ダランベールは、一八世紀中葉は、「人間精神の歴史において、思想の世界で起こりつつあるように思われる革命によって時代を画するだろう」と言ったというが、たしかに一七五〇年前後にはこの時代の主要な作品の幾つかが現れている。モンテスキューの『法の精神』が一七四八年、ビュフォンの『博物誌』が一七四九年、ルソーの『学問芸術論』が一七五〇年、『人間不平等起原論』が一七五五年、ヴォルテールの『ルイー十四世の世紀』が一七五一年、『諸国民の風俗と精神について』が一七五六年、ディドロの『百科全書』の初巻が一七五一年、コンディアックの『感覚論』が一七五四年である。

ところで、大著『博物誌』を著わしたこの稀代の博物学者は一般に「文体は人そのものである」（「文は人なり」と人口に膾炙しているが）という名言で知られているが、フランス一八世紀を代表する哲学者（フィロゾフ）philosophe・作家écrivainの一人である。なおここでいう哲学者・作家とは現代一般に用いられている意味合いとは若干異なり、広い意味での知識人cercle（原義は聖職者）、エドガール・モラン流に言えば「《理性》の普遍的真理を表現し、迷信と無知蒙昧に対して闘いを挑むことを決心した者」のことである。

また厳密に言う、フランス一八世紀の啓蒙思想・哲学とは一般に言うところの哲学、即ち論理一貫した緊密な体系的な哲学のことではない。つまり、「フィロゾフ」が十人いれば、その数だけ哲学があると言われる。十人十色なのである。「フォントネルは機械論者、ヴォルテールは求めてやまぬ懷疑の有神論者、エルヴェシウスは〈利己的な〉唯物論者、デイドロは超道德的な唯物論者、ラ・メトリーは医学者、ダランベールは幾何学者、モンテスキューは法学者」であり、ビュフォンは博物学者となるのである。

ただし、彼らには一つの共通点がある。それは、科学的方法に想を得て事物の経験的調査・観察・思考を行ない、それまで「偏見」によって隠蔽されていたその相関関係を探求し、より深く新しい説明・記述に至るという、ある一定の精神的態度である。この点、ピエール・ガグゾットという歴史家はこう言っている。「もっとよい言葉がないので、我々が『フィロゾフ』と呼び続けている人々は、実際は互いにきわめて異なっており、無神論者もいれば有神論者もいて、個人的な対抗意識や嫉妬などではばらばらである。だが、同じように《狂信》や伝統を嫌悪し、社会、その法律や習俗を抽象的な理想によって判断・批判するという欲求をもつ点においては一致している」。フォントネルはこうしたフィロゾフたちを「実験哲学者」と定義づけたというが、けだし名言であろう。

さて、ジョルジュ・ルイ・ルクレールこと、ビュフォン伯爵は一七〇七年、フランス中東部・ブルゴーニュ地方のコート・ドル県の郡庁所在地モンバールに、旧制度下のブルゴーニュ高等法院評定官の息子として生まれ、一七八八年、パリで死去している。フランスでは当時カトリック教会が初中等教育を施していたため、まずはイエズス会の教育を受け

る。青年に達すると、法学を望んだ父親の意に反してアンジェの医学校に進み、後にイギリスに渡って一時ロンドンに滞在し、数学、物理学、博物学などを学び、帰国後ヘルズズの『植物計量学』を翻訳したり、ニュートンの著作等を紹介したりした。

一七三九年、彼は王立植物園（現在のパリ植物園）の園長職に就くが、領地のモンバールにも戻り、『博物誌』の執筆に励んだ。その学者・研究者としての生活は徹底していたようである。フランスの文学史家ギュスターヴ・ランソンなどはビュフォンが小説家でも詩人でもないのに、その浩瀚な『フランス文学史』（一八九四年）において、わざわざ一節を設けてこの博物学者を取り上げているが、その学者生活の猛烈ぶりはこうである。一七四九年、『博物誌』の最初の三巻が現れて以降、ビュフォンの生活はその続編の完成に捧げられたという。「可能になるとすぐ彼はパリを離れて、モンバールに赴いた。そこでは、五時に起床すると、書斎に閉じこもり、九時まで口述筆記の作業をした。九時に朝食を取り、髭をあたり整髪した。九時半、再び仕事を始め、二時まで没頭した。二時、昼食……」。

モンバールでは、これが、彼が死去するまでの三十九年間、十年一日のごとく繰り返された。かくして、何人かの協力者を得ながらも、『博物誌』三六巻（一七四九—一七八八年）が刊行されたのである。これは、ビュフォン没後、自然科学者ラセペードによって補足され、最終的には四四巻となる。

因みに、ランソンは「ビュフォンの作品の内容は我々の領分ではない」としつつも、科学者としてのビュフォンを称賛している。「彼は偉大な学者的精神の持ち主である。彼には科学的精神の明晰さと精確さがある」。この印象主義的批評を排して歴史的方法と科学的な態度を重んじた、謹

厳なる文学史家は、ビュフォンには多くの誤り、欠陥、大胆な主張もあるが、また多くの真実、新しく深い思想、大胆で豊かな予見があると認めつつ、殆ど手放してこの先人を称えている。フランスにおける、ダーウインの偉大な先駆者ラマルクはビュフォンの弟子である、と。だが、ランソンがその文学史で科学者ビュフォンにあえて言及するのはそのためだけではない。また後者が文学に博物学という新たな領域をもたらしたことだけでもない。

当時、一八世紀前半は科学が流行しており、サロンを中心とした社交界では科学談義が一種の趣味・余興、お遊びの道具と化していた。貴婦人のサロンを渡り歩いて怪しげな科学論を吹聴する似非フィロゾフもいたのである。そうした風潮を排して、ビュフォンがその厳密で客観的な言説を普及させるには、第一級の作家の才能を必要としたのである。ランソンが着目したのはそこである。ビュフォン自身もそのことには気づいていた。彼は、一七五三年のアカデミー・フランセーズにおける受諾演説（一般には『文体論』）で、「よく書かれた作品だけが後世に伝わるだろう」と述べている。つまり、彼は諸観念の秩序と脈絡に気を配り、表現を主題、つまり彼の著作が例証する理論に完全に適合させることを心がけたのである。

たしかに、ビュフォンはその表現や文章の彫琢に励んだようだ。残された原稿に拠ると、一つの文が四度も五度も書き直されていることもあるという。彼の文が饒舌だとか美文調だとか非難されることがあるが、彼はなにも字を銜ったり、潤色したりしようとしたのではない。ビュフォンが推敲に推敲を重ねたのは、その意図を明確にし、表現を明快にしようにとしたからであろう。ここでは、文体^{style}という語は本来ラテン語の *stylus* の第一義、即ち銘板に文字を刻む鑿か錐を指していたことを想

起せねばなるまい。

それゆえ、ランソンが称賛するように、「ビュフォンによって、それまで絵のように描くテーマにすぎなかった自然の描写が叙情的なテーマ」になったのである。ランソンと同時代の批評家エミール・ファゲなどは、ビュフォンはルソーとともに一八世紀最大の詩人であるとまで激賞しているという。なお文体に関しては、百科全書派のダランベールもビュフォンは饒舌だなどと批判する一方で、こうも言っている。「『博物誌』の著者ビュフォンは、その名声が日ごとに増大している著作の中に、哲学的な主題にきわめてふさわしく、また賢者の著作では、その著者の心の肖像となるべき、あの文体の高雅さと高貴とをふり注いだのである」。もっともランソンによれば、ビュフォンの文体の典雅さは共作者の多い『博物誌』よりも、むしろ彼の単独の著作『地球の理論』や『自然の諸時期』などにおいて顕著であるというが。

勿論、一八世紀フランス社会にはリンネの信奉者を始め、多くの反ビュフォン派もいた。例えば、ヴォルテールはビュフォンの『博物（自然）誌』を「それほど自然ではない」と辛辣に皮肉り、こうも言っている。「誰か（ビュフォン）、大胆にも、引潮のない海や、引潮が七、八フィートの海が四〇〇、五〇〇トワーズの高さの山を形成したとか、地球全体が燃えていたとか、地球がガラス状の球体になったなどといった者がいるが、そういう空想は物理学の名誉を傷つけるものである。そのような話は歴史に相応しくない」。もっとも、文体に関してはビュフォンと似たような意見を述べている。「論題に相応しい文体以上に困難で稀有なものはない」。

だが、このヴォルテールをゲーテが批判している。ゲーテはヴォルテールがノアの洪水伝説を否定し、貝殻化石を単なる造化のたわむれにすぎ

ぬとしたことに反発し、「私は……実地に目撃して、自分が古代の乾上ったところ、その原生動物のぬけ殻のあいだにいること」(『詩と真実』第十一章)をはっきり見ていると断言している。

また、ルソーはルソーでビュフォンを「当代随一の文筆家」と称賛しても、科学者としては偉大とは言えないと断言した後だし、コンドルセに至っては、科学アカデミーの書記としてビュフォン頌を書くつもりが、とんでもない酷評をする始末であった。『感覚論』のコンディアクもあちこちでビュフォン批判を繰り返している。さらに後には、ビュフォンは科学的方法の代りに修辞学を用い、根本的な体系の代りに文体を重視したと批判され、「文体では一番、学識ではしんがり」などと揶揄されることにもなった。

しかし、こうした批判は的はずれだろう。ビュフォンはむしろ当時流行の「雄弁さ」、つまり「洗練され、凝った作爲的な文体」に異議を唱え、アカデミー・フランセーズで演説したのだから。彼は、「マリヴォーダージュ(あまりに技巧的な、凝った、細かすぎる文体)」「これは一八世紀のフランスの作家マリヴォーの艶やかな擬古典的・ロココ的な文体のこと」は嫌いだっただけだ。

要するに、当時大評判をとった『博物誌』の著者は自然研究者、科学者としてよりも「偉大な文学者」として評価される側面も大きかったのである。だがそれは、フランスには、文学史的に見て、中世の昔から「動物誌」、「鉱物誌」など読者を教化するために書かれた博物誌的な物語、科学的な物語の伝統があり、ビュフォンはその系譜に属していたからであろう。またこの「文学共和国」では、取り扱われる主題が科学的であれ、哲学的とか思想的であれ、それが人間存在の究明とか社会の考察探究と密接に結びつくものであり、さらにそれが美しい言葉や洒落た

表現で綴られているならば、「文学作品」と見なされる。なにしろ、数学や物理などの生徒の答案にも、フランス語としての正しさ、明晰さが要求されるお国柄である。フランスは、真実と論理を重んじるドイツなどの学問文化と違い、美しく快適な言葉の響きを尊ぶ国なのである。ビュフォン自身、そのことをよく心得ていた。モンテスキューは『法の精神』をフランス文学に取り入れたと言われるが、ビュフォンは、初歩的とはいえ、博物学あるいは自然科学をフランス文学に導入したと言えるだろう。ランソンのビュフォン評価はこうした観点から捉えねばなるまい。ビュフォンはさしずめ「科学的作家」とでも言えようか。

なお、フランスを「文学共和国」に喩えたが、この表現は既にヴォルテールがダランベールに宛てた書簡の中で用いている。前記のP・ガズゾットに拠ると、「この共和国は虚構ではない。それは存在する。それは生きている」。勿論、一八世紀のパリを中心としての話だが、「それは一つの組織された小世界sociétéであり、年ごとに強まる。それにはその正統性もあり、要塞も連隊も持つ。そして徐々に、王国をサロン、アカデミー、フリーメーソン、文学協会、朗読会などのきわめて密度の高い組織網に封じ込めていく」。

そしてやがては、アカデミー・フランセーズをも取り込むものとなり、革命前後には、フランス中の町に各々の思想家の駐屯部隊がおり、啓蒙センターがあった。フランスの端から端まで、パンフレット、書簡、建白書や請願書が飛び交い、至るところでフィロゾフたちが同じ精神、同じ方法で同じ体制批判や議論に励み、そうした熱気が民衆のエネルギの塊となって、人々を聖職者階級や宮廷に対して立ち上がらせるのである。ただし、この「文学共和国」はいわゆる世論ではなく、フィロゾフたちがそれを馴化したり、利用したりするための手段・道具であったが。

ところで、ビュフォンは博物学者以上に「フィロゾフ」であったといわれるが、その礼賛者は後世のランソンやファゲのような人物だけでなく、同時代にもいた。ロシアの女帝エカテリーナ二世である。この「啓蒙専制君主」とも「北方のセミラミス（美貌と聡明さで有名なアッシリアの伝説上の女王）」とも言われた、ドイツ出自の女帝は、大のフランスかぶれだった。ヴォルテールと文通し、デイドロを宮廷に招き、同国人のF・M・フォン・グリムとも親交があった。また、モンテスキューの作品のロシア語訳の資金援助もしているが、とりわけ、彼女はヴォルテールの生徒であると自称し、その大ファンであった。この「師匠」が死ぬとすぐに、その蔵書と「残っている書類全て」を購入しよう命じたという。なんと驚くことに、その彼女がこの「フェルネーの長老」の次に崇めたフランスの思想家はビュフォンだったのである。

一七七九年、彼女はグリム宛の書簡で、いま『自然の諸時期』を一気に読んだと興奮した様子でこう書き送っている。「そのお話を致しますと、そこにはこれまで人間精神の、と申しますか、人間の天才にも『前人未踏』であったような一つの仮説があります。ニュートンは巨人の一步を踏み出しました。これは第二步なのです。こうした本を読みますと、大きな知恵を授かったように思います。ああ！ムッシュー、ビュフォンの仮説は人々の心をかき乱し、揺さぶるものですね。そしてエカテリーナは、お気に入りのフランスの著名な彫刻家ウードンに対し、ヴォルテールの胸像に次いで、ビュフォンのそれも彫るよう依頼したのである。

因みに、このエカテリーナ二世には「啓蒙的君主」としては、前世紀にスウェーデン女王クリスティーナという先人がいた。この女王は三〇年戦争時のスウェーデン王グスタフ・アドルフの娘だが、ヴォルテールの『ルイ一四世の世紀』によれば、「女王は八カ国語に通じ、デカルト

の弟子で同時に友人」であり、二七歳で自ら退位し、当時芸術の栄えていたイタリアを幽居の地に残った稀有な人物であったという。デカルトはストックホルムの宮廷で客死している。ただし、退位後、この女王は立ち寄ったフォンテーヌブローのフランス王宮で侍臣を暗殺させるという情実事件を起こしており、ヴォルテールに指弾されている。

さてこのように、ビュフォンは存命中から名声を得て、若くして王立植物園園長になり、伯爵位を授与されているが、そうした世俗的栄誉だけでなく、彼が博物学者、「フィロゾフ」として啓蒙思想、とりわけ自然科学の思想的系譜において占める位置は大きい。一般に、彼は生物変移論「Transformism」の創始者の一人であり、後の進化論を予示したとされるが、広範囲におよぶその思想はその頃の科学の全領域に広がる大きな知に基づくものであり、当時の社会や人々の間に自然科学に対する新たな興味を引き起こしたと言われる。ビュフォンはそうした伝統的な知の革新を行ない、地学、古生物学、系統学、生理学などのあらゆる領域においてきわめて批判的な観点とまったく新しい思想をもたらしたのである。

たしかに、彼はヴォルテールやデイドロのように上昇階級ブルジョワジーの高くうねる波に乗った啓蒙思想家として、時の爛熟腐敗した王朝文化や権力に反抗とか対抗したわけではない。またその著作を武器にしてカトリック教会の不寛容や偽善と闘ったものでもない。彼はただ自然とは何であり、それがどのように存在しているかを科学的方法によって観察・探求し、博物学という分野において総合的に記述して、自然をそれ自体として提示したのである。こうしたビュフォンの態度に、いわゆるフィロゾフたちは腹を立て、彼が科学書を著わす学者の立場に留まろうとしたことが許せなかったという。だが、次のようなエピソードがあっ

たのを見ると、事実は若干異なるようだ。

ビュフォンはその名著『博物誌』において、地球の起原から説き起こし、地球史という遠大なバースペクティヴで動物、植物、鉱物など自然総体を包括的に記述しているが、その五年前に著わされた『地球の理論』が既にして文字通りスキャンダルだった。

つまり、品性からしても精神からしても貴族であり、科学アカデミーの会員であるビュフォン伯爵の著作は無名の学者の手によるものではなく、しかもその内容が既成観念に異議を唱え、創世記を冒瀆するようなものだったので、ソルボンヌの神学部のお歴々の怒りを買ったのである。ビュフォンは反抗せず、問題になった箇所を公式に撤回した。だがこれはまったく外見上の服従だったようだ！後に、彼は内輪でこう洩らしたという。「民衆には宗教が必要なのだ！ソルボンヌが難癖をつけてくるなら、彼らが望むようにしてやったところで、私はなにも困らないよ。ただ〔服従したかのように見せて〕茶番を演じただけなのに、人間というのは結構愚かで、それで満足するものだ」。

また、『自然の諸時期』（一七七八年）の緒論で、ビュフォンは『創世記』の最初の数節を逐一検討・解釈している。まず「初めに神が天と地を創造された」を引いて、これは初めに神が天と地の「物質」を創造されたと読むべきであり、またこの「初め、すべての時代の中で最も古いこの最初の時代は長期間続いていたように思われる」などと自らの立場を明確に表明している。そして以下、自分には神の御名を汚すような気持ちには毛頭なく、神の造りたもうた自然の姿を、「天上の光より漏れいずるこの光明」のもとで注意深く見つめることが大切だと弁明し、緒論の末尾では「わたしの体系は純然たる仮説であり、啓示された真実を害することはできない」、それは万古不易の公理であり、自分はそれに従っ

ている、と結んでいる。これ以外にも、ビュフォンは至るところで、「造物主」の手の働きを認めており、その手が自然界を造りだし、天文学的な時間を経て人類という種が出現し、この種が自然に手助けをして、地球社会を形成してきたのだという。

勿論、そこにはソルボンヌの神学部向けのカムフラージュの側面もあるが、代々世襲の貴族ではなく、新興の法服貴族であったビュフォン伯爵の半分は本当の顔かもしれない。また彼は実際、人間の理性は始源の世界の原因には遡れないのだから、科学は現象の研究に止めるべきであると考えていた。結局、前述したように、ビュフォン伯爵は何よりもまず一八世紀的な意味での「フィロゾフ」であったが、他の者とは別な風に「フィロゾフ」だったのである。例えば、ランソンが言うように、「彼は他のフィロゾフとともに進歩を信じていた。しかし、彼はそれを彼らのようには信じなかった」のだ。

では、スキャンダルを呼んだビュフォンの主張とはどんなものだったのか。これはトマス・ジェファソンとの新世界論争の根幹に係わることで、これも少し詳しく見ておこう。

『地球の理論』は後に『自然の諸時期』によって補足されるが、これは当時の既成観念と真っ向から対立する大胆なものだった。当時、地球の生成に関しては、地球や他の惑星は各々が白熱に光る流体状の古い太陽から成ったとされていたが、ビュフォンは初めて、全惑星が原始には太陽を中心とする同じ一つの天体に属していたことを認めた。彼の説によると、地球は絶えず冷却しながら、堅い地殻と、ガラス状の物質から成る高温の熱い深層部・中心圏が形成され、冷却が続く間に地殻の膨張・起伏が起こり、山が生まれる。大気も同時に冷却し、それに含まれた水蒸気が濃縮して大洋が形成され、その波の運動によって山が削られ、堆

積が起る。やがて海水面の低下が進むにつれて大陸が浮上してくる。そして地球が今のような輪郭を成し、植物や地上の大動物が生まれ、人類が出現するものである。

こうしたビュフォンの見解は今から見れば素朴であり、ごく普通のことだが、ケプラーやガリレオのような天才的天文学者が出てからそう長くはない時代のことである。たしかに、ビュフォンは山脈誕生の起原を見誤ったし、地球全体がかつて海に覆われていた時期があったとするなど過ちを冒している。だが彼は、一八世紀初頭に、地球が長期間にわたって、大きな変動を繰り返し、その間に気候風土が変化し、その結果植物相や動物相がある一定の秩序を保って持続的に出現したことを理解していた。ところが、科学的・実証的な調査・検証に基づいて展開された、こうした彼の思想が、「ノアの洪水」伝説を否定するものだったのである。ヴォルテールの友であったアルジャンソン公爵はこう書いている。「ビュフォン殿は本が成功したお陰でぼうっとし、ご心痛のようだ。信心家どもは彼を死刑執行人の手で火炙りにしてしまえと言っている。実際、彼は創世記をまるごと否定したのだから」。

ビュフォンの著作の影響はそれほど大きかったのである。もっと具体的に見ておこう。

前述したように、彼は生物変移論の創始者の一人であり、進化論の先駆者というより真の創始者であるとも言われているが、その思想を象徴的に語るのにはロバに関する一節であろう。勿論、その前にビュフォンは『博物誌』第四卷（一七五三年）において、「総論」の後、「胎生四足獣（哺乳類）——家畜動物」の項で、第一の動物として馬について語り、馬は「人間がかつて得た最も高貴な獲得物」とであるという有名な文句を残している。

なお、馬はアメリカ大陸にはいなかった動物で、コロンブスやコルテスなどのスペインの征服者によって「導入された」と言われることもあるが、本来は北米大陸原産である。馬の歴史は複雑だというのが、少なくとも五五〇〇万年前の第三紀初期、始新世の時代に遡り、その頃はグレイハウンドのような奇妙な小動物であつたらしい。現在我々が目にする馬がどんな馬の原種から来たのか定かではないが、その最古の型は化石から、約四〇〇万年前に現れた北米大陸のものであることだけは分かっているという。

そして時代が下って約二〇〇万年前、氷河期にベーリング海峡を渡ってユーラシア大陸に移動した種が数十万年後、多様に変移し、旧大陸を疾駆していた。それが、北米大陸では、第四紀に栄えた後、大規模な気候変動で一万年前に他の四足獣とともに絶滅したとされている。この氷河期の絶滅を免れたヨーロッパとアジアの馬が残り、約六〇〇〇年前から人間が家畜化を試みたという。ビュフォンはこうした馬がいつの頃か変移・退化したものがロバであるという。

それによると、ロバは「退化した馬でしかないように思われる。脳、肺、胃、腸管、心臓、肝臓やその他の内臓の形態が完全に類似していること、また胴体、脚、足、骨格全体がまったく似ていることがこの見解を裏付けるようだ。この二つの動物に見られる小さな違いは気候風土と食物の長期間の影響を受けたためであらうし、また半ば退化した野生の小さな馬が偶然数世代続き、それが徐々になお一層退化し、次いで（種として）限度いっぱい劣化し、ついには我々から見えて一定の新種となったことに拠るものであらう」。

こうしたビュフォンの見解で注目すべきは、モンテスキューの「風土理論」にも似て、彼が外的条件の影響で種が変異（退化）するという仮

説を唱えるとき、それは時間とともに消滅するかまたは「多くの場合」新しい種の誕生・発展に至るところであろう。

つまり、元に大きな一つの目 order なり科 family があって、そこから自然によって生み出され、時間によって変移した別の存在が出現するが、それは「元の種の混淆、持続的変移、退化」によってであるという。人間を含めてあらゆる動物を同一の起源、同一の原初の生物に結びつけ、すべては子孫代々を経てそこから派生するという生物変移論をこれほど明確に表明した者は、それまでいなかった。これがビュフォンの独創であろうが、またスキャンダルも呼んだのである。もっとも、前述したように、彼はそこに「造物主」、「至高の存在」の手を認めてはいるが、外見上のことであって、後には一般的な啓蒙思想の進展もあって、より大胆になる。

そしてこうした観点に立つと、「馬、シマウマ、ロバは三つとも同一の科に属する。馬が起原とか元の幹であれば、シマウマとロバはその分枝となるであろう。それら相互の類似の数が相違の数よりもはるかに多いので、それらを同一種と見なすことができ、その主要な性格が明確になり、三つに共通であることになる：それらは真に単蹄である唯一の種である」。以下同様で、あらゆる雌羊や山羊は同一の科に属するものと見なし、犬、狼、狐、ジャッカル、北極狐は別の属を形成するとなるのである。さらに、こうしたさまざまな動物種をその属とか起原に結びつけて、それを少数の科とか目に集約していき、そこに比較の觀念が加わると、生物変移論のロジックが強化される。

そしてビュフォンの場合、新旧両大陸の動物の比較論が生まれ、「実際、野生の自然とひとの手が加えられた自然を比べてみたまえ。アメリカの野蛮な小民族と我々の文明化された大民族を比べてみたまえ」(『自

然の諸時期』)となる。かくして、これが問題のジェファソンとの「新世界論争」の契機となっていくのである。

ビュフォンによると、新世界では、五〇種類ばかりの土着の四足獣が認められるが、これは一〇の属と四つの単独種に分類できる。ところが、こうした新世界の種はすべて「旧世界のものとはまったく異なっているのに、それでも遠い関係があり、その生成過程において何か共通なものを示しているように思われ、また他のものよりも大きく、たぶんより古い退化の原因へと遡らせるものである」。例えば、アメリカ猪は「豚属の退化種にすぎず、むかし旧大陸にその起源を発した」ものと思われる。またアメリカ虎は普通ジャガー、ピューマ、オセロット(大山猫)、マーゲイ(虎猫)などの名で記述されるが、「旧大陸のパンサー(豹)、レオパード(アジア・アフリカ産豹)、雪豹、チータ、サーバルキャット(アフリカ産山猫)などとはまったく異なった種であるのに、それでも同じ属になる：したがって、かなりの根拠をもって、これらの動物が同一起原を有しており、むかし大陸から大陸へと移動したために、そうした相違が新しい状況から長期の影響を受けて生じたものと推定される」。

前述したように、この「新しい状況」とは環境、気候風土、餌食物であり、それを司る「自然の大きな働き手は時間である」。その新しい状況下で、次第にある個体の生物組織の変移が起こり、それが代を経て「獲得形質の遺伝」となって伝わっていく。ビュフォンはこうした進化的論的図式をラマルクに先駆けて示したといわれているが、それがなぜ新大陸の動物は旧大陸の動物に比べて劣るなどという偏見を生んだのだろうか。

一八世紀の大きな論争の一つに地球、世界の年齢の問題があり、宗教的かつ「哲学的」に重い意味をもつ争点になっていた。かつて自由思想家に批判されていた洪水論が甦ったのである。いわば、「ノアの箱舟」伝説が再浮上して来たようなものだが、聖書の世界の物語ではなく、この時代の科学的観点からの物理的・地質学的な意味での洪水論である。つまり、地球の生成時のある時期に洪水期があって地表が海で覆われており、その水面が低下したことによって陸地が生じたとする説であり、「フランスの庭」と言われるトゥレーヌ地方で道路造成時に発見された貝泥（貝類と珪土からなる堆積物）がその説を証明するきっかけになったという。

一八世紀には、この化石化した貝殻の問題は、前記のゲーテによるヴォルテール批判のように、大いに議論を呼んだものであるというが、ビュフォンにも類似の指摘がある。彼は多くの地層を詳細に調査して、そこに砂や石灰石、粘土、大理石、砂利、白亜、燧石などに混じって貝殻があることに気づいた。「さらに、内陸部や山の頂上、海からきわめて遠い所に、貝殻、海魚の骨、海洋植物の残骸が見出せることが分かった」という。勿論、それは岩や大理石、白亜、大地に化石化されたものだが、ビュフォンはそうした化石の意味をよく理解していた。

ところで、こうした地球の年齢説が問題になると、当然、では人類の年齢はどれほどか、人類の誕生はこの洪水期の前なのか後なのかという疑問が生まれる。そして一八世紀のこの時代には、このような論法が歪曲的に展開し、ある民族の年齢はその住む土地のそれに対応し、古くから浮上した土地には古い文明があり、「乾いてまもない」土地には新しい民族が最後の雨から降ってきたことになる。新大陸のアメリカとこの住民がそうだというのである。

つまり、アメリカは洪水期を脱したばかりの未発達・未成長の土地で、切り立った山が聳え、森と沼沢地に覆われ、広大な不毛の砂漠のようなものだとなる。したがって、そこでは生き物は発育が悪く、人間は虚弱になり、種が小さくなり、縮こまるという。いかに二〇〇年前とはいえ、驚くべきことに、当時の博物学者も哲学者もこうしたとんでもない、奇妙な偏見に染まったのである。

そして繰り返すが、その中心にビュフォンがいたのである。彼は既にして学者の権威も備え、天才的人物としての威信に包まれ、彼への尊敬は崇拜に近かったという。まさにヴォルテールカルソナーミの名声を得ていたのである。それだけに、彼の役割は決定的で、その誤謬と罪は大きかった。この博物誌の頭目は、「一般に新世界の動物はすべて旧大陸の動物よりもはるかに小さい」と断言しているのである。またフィロゾフの巨頭ヴォルテールでさえ、こう言っている。「メキシコやペルーには一種のライオンがいたが、小さく、たてがみがなかった。もっと奇妙なのは、そうした風土のライオンは臆病だったことだ」。

さて、フランス一八世紀のこうした驚くべき風潮、奇妙な偏見に対して、新興アメリカ共和国を代表して反論したのがトマス・ジェファソンである。このアメリカ第三代大統領は（大統領になる前だが）そのために『ヴァージニア覚え書』で長い一章を当てている。彼もこの「著名な動物学者 the celebrated zoologist」に対し、称賛と敬意を表してはいるが、「偶像破壊」になるのを承知でビュフォンの見解の誤りを正そうとしている。

新世界論争が起こった一七五〇年頃は、アメリカはまだ単なるイギリスの植民地にすぎなかったが、ジェファソンが反論を試みだした一七八

○年代初めは、独立戦争を戦った後で、仏米はいわば「同盟国」の良好な関係にあった。ところが、その間にも、アメリカ大陸の「鶏は卵を産まず、犬はほえず、虎は臆病で、人間は發育不全で欠陥がある」などという謬見が絶えなかった。それほどこの「博物学的」偏見は根深かった。しかも弱まるどころか、ビュフォン製のウイリスはパリに留まらずヨーロッパ中に蔓延し、とくにドイツでフンボルトの同意を得たという。

新興国アメリカにとっては、こうした偏見を撲滅することが、いわば政治・外交上の重要課題だったのである。この役割を真正面から引き受けたのがジェファソンである。だがその前に、彼の前任のパリ駐在公使ベンジャミン・フランクリンもこのゆえなきアメリカ不毛・劣等・劣性論に対抗して悪戦苦闘していた。

ある日、フランクリンハはパリ一六区パッシーのアメリカ公使館の食卓にアメリカ人とフランス人を同人数招いた。その中に、主賓としてレナル神父なる人物がいた。彼は、『二つのインドにおけるヨーロッパ人の植民地と交易の哲学的・政治的歴史』（一七七〇年、四巻）を残しているが、これは反植民地主義的かつ反教権主義的著作で地下出版されたもので、当局の命令により焚書にされた。そのため、後に著者はフリードリヒ二世、エカテリーナ二世のもとへ亡命せざるを得なかった。この本はアメリカの博物誌を主目的としたものではないが、ビュフォンの影響を強く受けており、その新大陸への否定的主張は過激だった。この神父がわざわざ招かれたのはそのためである。

会食の席上、フランクリンは神父にアメリカの「狭小さ」の話をさせた後、突然会話を中断して、国籍ごとに並んでいた客たちを立たせた。アメリカ人全員がフランス人の一番背の高い男よりも大きかったのである。レナル自身はごく小柄な男 *a mere shrimp* であったが、この冗談

には苦笑して頷きながらも、自説は曲げなかった。もっとも、版を重ねた後の改訂版では、さすがにレナルも誤謬を修正せざるを得なかったという。なにしろこの神父は、植民地アメリカには立派な詩人も優れた数学者もいない、つまり芸術、科学どの分野においても一人の「天才」も生まれていないと書いていたのだから。フランクリンが避雷針を発明したのは一七五三年なのに！

なお、このレナル神父について付言すると、彼はディドロの友であり、ディドロは前記『二つのインドの歴史』の出版に協力したという。この二人の関係で興味深いのは、ディドロの『グリムに宛てたレナル神父弁護の書簡』で語られるエピソードである。この長文の手紙は、グリムが、ディドロの娘のヴァンドゥル夫人やその他のサロンで、レナル神父を非難したことに対して「怒って」書かれたものだが、ディドロはそこで三〇年来の友グリムがエカテリーナ女帝やフリードリヒ二世の追従者・幫間に成り下がったと言って論難し、レナルの大胆さをフィロゾフの真摯さの現れであるとして擁護している。

ディドロはまたフリードリヒ二世などは「野心的な政治家」で、「ヨーロッパの永遠の扇動家」であり、文学者たる者はそのような「権勢家の召使い」になつてはならないとグリムを諭す一方で、レナル神父の過激さにも懸念を示している。実際、この神父の著作は一七八一年、パリ高等法院によって、「不信心、冒瀆的、反乱誘発的で、最高権威に対して民衆を煽り、公共秩序の基本的原理を覆そうとするもの」として断罪されている。しかし、旧社会に対してはそれほどラディカルであったこの神父が、新世界に対しては奇妙な偏見に取り憑かれていたのである。

まさに「アウゲイアスの厩舎の大掃除」が必要だったのだ。この喩えは、ギリシア神話で、ヘラクレスが川を引き入れて、三〇年も放置され

ていたアウゲイアス王の厩舎を掃除したという挿話からきたものだが、ジェファソンが新世界論争に決着をつけようとしたのも、その発端からほぼ三〇年たった頃なのである。彼とその非公式の brain trust にとって、不当に貶められたアメリカのイメージ払拭がいわば喫緊の至上命令だった。

ところで、ジェファソンがビュフォンに反論した、この『ヴァージニア覚え書』は彼の唯一の著作であるが、これが書かれた経緯は当時のフランスとアメリカの関係をよく物語っており、興味深い。邦訳（岩波文庫、一九七二年）の訳者（中屋健一）解説によると、一七八一年、ルイ一六世のフランス政府は、駐米フランス公使館に対して、連合を構成していた「アメリカ合衆国」一三邦（州）の地理・人文・産業などについて調査を命じた。当時これを担当したのが書記官ド・バルベ・マルボア候なる人物で、彼は各州の指導的人物に調査を依頼するための質問文を作成し、これに対する回答をまとめて本国政府に報告しようと考えた。ヴァージニアを代表して答えたのが、その頃ヴァージニア州知事だったジェファソンである。なお、後述する『アメリカの民主主義』のトクヴィルは、ジェファソンを「かつて民主主義がもたらした最も強力な使徒であると考えている」という。

またこれが書かれた状況・挿話も、独立もないアメリカの立場に関して示唆的である。当時知事職の激務にあったジェファソンにものを書く暇などなく、ペンを取ったのは知事辞職後だが、その直後、モンティセロの邸は彼を捕虜にしようとしたイギリス軍の襲撃を受け、別のプランテーションに避難せざるを得なかった。しかも、この避難先で落馬して体を痛めて外出できなくなったため、思わぬゆとりが生まれ、その間、

メモ魔だったという彼は集めた膨大な資料を整理し、モンティセロに帰ると一気に書き上げたという。因みに、初代米国大統領ワシントン同様、ジェファソンも大農園主であり、奴隷の所有者であった。

さらにこれが印刷された状況も、ある意味で象徴的である。一七八五年、ジェファソンはフランクリンの後任のフランス公使として、パリに赴くが、『覚え書』が初めて印刷されたのはこの赴任先であった。この「オリジナル・エディション」はスモール・オクティヴオ、三九一頁、部数は二百部、匿名で公刊はされなかったという。匿名だったのは、独立宣言の頃と違い、当時は保守派が台頭しており、奴隷制度やヴァージニア州憲法に関する見解が急進的であったと言われるジェファソン自身がその影響を危ぶんだからである。それゆえ、これはアメリカとフランスの友人だけに贈呈された。

一七八六年、この『覚え書』のフランス語版がパリから出版されるが、英語の最初の公刊版が出るのは次の年の一七八七年、ロンドンからである。これが「ファースト・エディション」と称されるもので、加筆修正されたこの版で初めて著者名が明かされたのである。こうした経緯は一八世紀後半のフランス・アメリカ・イギリスの微妙な政治的・外交的三角関係をよく物語っている。

さて、この『覚え書』は前記マルボア候の二三項目の質問への回答の形で書かれているが、ジェファソンの博識ぶりには驚かされる。数人の友人の訂正や助言を受けて作成されたとはいえ、大半は自ら収集した膨大な資料を基にして、彼はありとあらゆるジャンルにわたって記述・回答している。例えば、それは「ヴァージニアの境界から始まって、河川、海港、山、滝、鉱物、植物、動物、気候、人口、陸軍、海軍、原住民、群と町、憲法、法律、大学、建物、道路、王党派に対する処置、宗教、

風習、工業、商業、度量衡と貨幣、財政収支、歴史、記念物、公文書」などについて詳細かつ明瞭に述べられている。

まるでヴァージニア百科である。その具体的に精確な記述を読むと、ジェファソンは年長のフランクリン同様、まるで新大陸の百科全書派の観がする。この二人はともに独立宣言の起草者であり、大きな政治的業績を残しているが、単なる政治家ではなく、哲学や科学の造詣の深い、いわばアメリカの真正正銘の「フィロソフ」だったのだろう。もっとも、前記モーロワの『アメリカ史』によると、ジェファソンはたしかにディドロやルソーの賛美者であり、一八世紀的な哲学者だが、その記憶は百科辞典式でも、初歩の百科辞典に過ぎなかったという。

たしかに、この『覚え書』はジェファソンその人の考え方や趣味、政治的および社会的見解を知る上で有益のみならず、アメリカ合衆国建国時の歴史的な資料としても重要であろうが、我々にとって注目すべきは「質問六」への回答文である。この質問項目は「鉱業およびその他の地下資源、樹木、草、果実についての情報は如何？」とあり、ジェファソンは金鉱石や鉛・銅・鉄鉱山から、石炭、大理石、石灰岩、岩石に印された貝殻の跡、洞穴、塩泉、薬効のある泉に至るまで逐一答えている。

だがなんと言っても圧巻は、植物種や動物種の一覧表を掲げてフランスの博物学一派、とくにビュフォンに対し、きわめて明晰・冷静に反証・反論を行なっていることであろう。それも植物について言えば、アメリカ土着のものに限ってあるとはいえ、薬用、食用、装飾用、建築用に分けて、「一般的名称の後にリンネ式分類」によるラテン語の学名が付されている。ビュフォンはリンネ式分類法を一切否定しているが、ジェファソンは一般名だけでは厳密な情報が伝わらないとしてそれを付け加えている。皮肉のつもりだったのだろうか。さらには、タバコ、トウモロコシ、ジャ

ガイモ、カボチャなどはヴァージニアで天然に生育したのか、栽培によるものなのか不明として一覧表から除外・区別する厳密さである。

また動物について言えば、「ヨーロッパとアメリカの四足動物比較表」と題して、一、両方に土着のもの、二、一方のみに土着のもの、三、両地方で家畜化されているものに分類され、各々に重量が付されている。ジェファソンは測量技師の息子であり、本人も観察・測定するのがマニアックと言えるほどの趣味であったようだが、こうした動植物の一覧表の精緻さ・綿密さを見ると、まるで学者はだしである。そして彼はそうした客観的な事実を根拠にして、ビュフォンの見解に異を唱えるのである。それは、前にも触れたように、旧世界と新世界に共通する動物は後者のものが小さく、新世界固有の動物はより小規模であり、両世界とともに家畜化されている動物はアメリカでは退化している、要するに「鶏は卵を産まず、虎は臆病である」という見解である。

これに対し、ジェファソンはまず四足動物で最大のマンモスを例にしてこう反論する。インディアンがビッグ・バッファローと呼ぶこの動物は、彼らの言伝えによると、その頃でもまだアメリカ大陸北部に生存しているという。この伝承はともかく、マンモスの骨はオハイオ川沿いの地方をはじめ、それ以北の地方で多数発見されている。それゆえ、象の何倍もの巨大動物がアメリカ大陸には棲息していたのである。それなのに、ヨーロッパの博物学者はマンモスの牙と骸骨は象のもので、歯はカバのものであるとしている。「動物史学の分野でもっとも見識の高いある著者」はこのような誤謬を改めるべきである、とジェファソンは反駁している（ただしビュフォンの名誉のために付言しておく、マンモスと象の同定はしあぐねていたようだが、歯に関しては現代のカバの三、四倍の大きさの、絶滅した古代種のものを見ていた。また「両大陸に共

通の別の動物、最大のゾウよりさらに大きな動物がいたことは疑うことはできない」と推定している。

またジェファソンは、新世界では「自然ははるかに活動的でもなく、はるかに激しくない」というビュフォンの見解にもこう反駁している。新旧の大陸を問わず、「ピグミー人もバタゴニア人も、ねずみもマンモスも」同じ自然、同じ太陽の恵みを受けており、棲息場所が変わったからと言って、ねずみがマンモスの大きさになるわけはなく、各々にはそれなりの造物主の定めがあり、それに従って存在しているという。そして以下、ジェファソンは熊や鹿、トナカイなど逐一例を挙げて反論し、結局はビュフォンもその協力者のドーバントンもアメリカ産の動物を実際に見たこともなく、その寸法や重量をはかったことはないだろう、と皮肉っている。ましてや、そうした気候変動論による動物の優劣説を人間にも当てはめるなど、the celebrate zoologistの言説とは信じられないとも言おうように、しらく（アルビーノ）の例まで引いているのである。

その他、ジェファソンはインディアンに対するビュフォンの不当な（今なら人種差別的な）見解にも、体験と実話を交えて抗議し、彼らはきわめて勇敢で、戦いでは降伏よりも死を選ぶと擁護している。さらには、この質問六の長尺の答えには「ヴァージニアの鳥」の一覧表まで加えられており、ジェファソンがビュフォンをはじめとするヨーロッパの博物学者の偏見を正そうという熱意がひしひしと伝わってくるのである。かくして、ジェファソンは数字には数字で、理論には観察した事実で、推論的記述には見本で答えるが、それでも足りないと思ったのか、実物作戦にも打って出た。彼は、ビュフォンが²ヘラジカ、北米・アジア北部産、とくにユーラシア産の現存する最大の鹿（を見たがっていることを知り、大枚をはたいてヴァーモント産の moose（北半球の極地周

辺に棲む大鹿）の頭部の剥製をわざわざパリに取り寄せたという。さらにジェファソンは立派なピューマの毛皮まで送らせた。誤りを正して真実を認めさせ、新世界の生き物の名譽を守るためには金銭の多寡など言っではいられなかったのだ。ところが、この涙ぐましい努力にもかかわらず、ビュフォンは自らの過ちを正し、アメリカの自然と人間の名譽を復権させることなく、一七八八年に他界してしまったのである。

一方、アメリカ大陸では、新世界論争のもう一人の主役であったフランクリンがビュフォンの死後二年経った一七九〇年に没している。だがそれでこの「論争」が終わったわけではない。たしかに、大鹿やトナカイ、熊やバッファローの大きさ、大山猫やピューマの強さ、敏捷さなどという「博物学的」論争は沙汰やみになったかもしれないが、これは姿・形を変えて今日に至るまでの仏米の「危険な関係」へと繋がっていくのである。現に、この後すぐ、前記の「宣戦布告なき戦争」が勃発する。

だが結局のところ、この新世界論争とは一体何だったのだろうか。たしかに、それはビュフォンの偏見を主因とするものであったが、その根は意外に深い。一八世紀フランスには、合理的・批判的・実証的精神があり、それがモンテスキューやヴォルテール、ルソーなどの社会批評、文明批評という形になって現れ、啓蒙主義の金字塔とも言える『百科全書』に結実していくが、ビュフォンの場合にはそれが博物誌という分野の革新となって出現した。ところで、こうした啓蒙思想のイデオログたちには一貫して変らぬ、いわば暗黙の了解のようなものがあつた。それは植民地など無益で危険であるという考え方、反植民地思想である。そしてこれが、新大陸への否定的感情に繋がっていくのである。

まず、ビュフォン自身にもこうした植民地批判があつた。「人間はい

つになったら、祖国の地を穏やかに享受するだけで幸福になれることが分かるのだろうか？ いつになったら、野望を捨て、支配を夢見ることなどやめ、多くは破滅的で、どう見ても有益と言うよりも重荷になる遠方の地を所有することを諦め、賢明になれるだろうか？ スペイン帝国はヨーロッパではフランスと同じほどでも、アメリカでは十倍の広さだが、十倍だけ強力なのだろうか？ イギリス人、この分別のある、実に思慮深い国民は植民地の境界をあまりに拡張すぎて、大きな過ちを犯したのではないか？ 古代人はそうした植民地についてのもっと健全な考えを持っていたように思われる。彼らは人口が過剰になったり、その土地や交易が彼らの欲求をもう満たさなくなったりした時にはじめて移民を企てたのだ。それにまた、この忌むべき征服がどれだけ多くの血を流したことか！ どれだけの不幸や損害がそれに伴い、続いたことか！」（『自然の諸時期』）

ヴォルテールは後述するようにもっと徹底しているが、彼にはもともととネガティブなアメリカ観がある。「一般に、アメリカはこれまでヨーロッパやアジアほど人口が多くなったことはない。アメリカはひどく体に悪い沼気を発散する広大な沼沢地に覆われている。土地は驚くほどの毒物を含んだ産物をもたらす。結局、アメリカ人は旧世界の人々ほどには能力を自然から授けられなかったのである。そうしたことをすべてが原因となって、人口増加を大いに妨げたのである」。「アメリカのライオンはひよわで臆病である（アメリカにはライオンはいないので、これはピューマのこと）」（『歴史哲学』——『諸国民の風俗と精神に——いて』の序章）。

それにしても、こうした反植民地思想は奇妙である。これは今日、一般的に言うところの反植民地主義Ⅱ反帝国主義的観点とは異なるように思われる。しかも、フィロゾフたちの書物は、ペルシア人、イロクオイ族、ヒュロン族、「インドの」マラバル人、トルコ人、ムガール人、サ

ルタン、中国人などで溢れている。勿論、こうした異国趣味は前記の一八世紀における社会・文明批評の反証的事例として提示されたものであろうが、ことはそれほど単純ではない。このにぎにぎしい異国趣味は方便にすぎないのだ。そこで描かれる異国人たち、「純なる人々」、「自然人」とは結局は、文明の恩恵にあずかりながら、「自然人・野蛮人」を取りをして楽しんでいる世紀半ばのパリ人、「純真さなき純なる人々」である。彼らはそうして当時の爛熟腐敗した王朝文化・社会の礼儀作法やロココ的洗練趣味を揶揄嘲笑しているつもりだろうが、実際は自己自身を嘲笑揶揄しているのだ。

たしかに、この時代の反植民地思想の風潮には矛盾した事例もある。例えば、モンテスキューは『法の精神』ではアンティル諸島を称賛しながら、『ペルシア人の手紙』ではこう言っている。「植民の普通の効果は、送り出す国々を弱らせて、送られた国々の人口はふえないということなのだ。人間は生まれた土地に止まるべきだ。我々が他の国に移されると、病気になる。君主たるものは植民によって大きな土地に人口をふやそうと考えるてはならない」（手紙の二二二）。そしてたとえそうした植民地が成功するとしても、それは国家の権力を強化するどころか、分割するだけだろうという。しかしここでも、「これらの植民が、貿易のための拠点を占めるために送られる場合のように、非常に小規模の場合はこの限りではない」と留保付きである。

またヴォルテールはその書簡において、インド会社について何度も熱心に語っている。彼はその株主であり、そこからの配当金を蔑ろにしていたわけではない。彼はそうした投機、アメリカ貿易や軍への糧秣供給によって巨万の富を築き、後には新教徒の救済のためとはいえ、ギアナ

に植民地をつくることまで提案している。ところが、この「フェルネーの長老」にもそうしたことが相反する見解が見出される。

例えば『インドに関する断章』ではこうある。「我々ヨーロッパ民族はアメリカを発見しても、そこを荒廃させ、血にまみれさせただけだ。

そうすることで、カカオや砂糖、藍、キナ皮などを手に入れてきた。それはパリやロンドンの市民の食卓に、むかし王侯貴族が味わった以上の香辛料を提供するためだ。また、普通のご婦人方に、かつて女王が戴冠式に身に付けた以上のダイヤモンドで身を飾らせるためなのだ。そして、それやこれやの、ヨーロッパにはない食品や奢侈品を獲得するための交易を確保するために、列強はアメリカやアジアの奥地で戦争をしている、と。この他、ヴォルテールは、『諸国民の風俗と精神について』『ルイ十四世の世紀』『カンディッド』などあちこちで、辛辣な植民地批判を展開している。その典型例がカナダ批判である。

前述したように、当時カナダはまだフランスの植民地であったが、その維持確保は人的にも物的にも高くつき、フランスの頭痛の種であり、反植民地派の恰好の標的であった。彼らにとって、カナダはアメリカ大陸は雪に覆われた土地、凍った砂漠、未開地、不毛な大地にすぎなかった。ヴォルテールは何度も繰り返し、これを攻撃批判している。

「カナダは高くつく割には、実入りはごく僅かだ。こんな地を維持しようとするから、百年の労苦を無駄にし、費やした大金も戻ってこないのだ」。「八ヶ月も雪と氷に覆われ、野蠻人と熊、ビーバーが棲息している」こうした不毛不良な国がそれでも、「殆どいつも土着人がイギリス人を相手にした戦争の原因になっている……こんな国を維持するための戦費は想像以上に高くつくのだ」。そしてモンテスキューのものと同じような嘆きが聞こえてくる。「たぶん将来、フランスで数百万人口が余分

になれば、ルイジアナに移民させるのもよからうが、やはりそこは放棄すべきであるというのが真実であろう」。「カナダなどは氷の海の底に沈んでもらいたいものだ」。挙げ句の果ては、こうご託宣を下すのである。「フランスはケベックなどなくても、幸福になれる」、と。

このように、植民地カナダに対するヴォルテールの悲憤慷慨ははなはだ強かったが、彼は既にして、近世ヨーロッパ社会の発展が植民地の獲得と搾取に負うところ大であることを慧眼にも見抜いていた、と言える。それは次のような痛烈な批判にも見られる。

「人智の進歩と、人間の凶暴性が結びつくため、二百年来、我々が戦をすると、惨禍が及ぶのはヨーロッパだけではない。金と命を少しも惜しまず、我々はアジアや、アメリカの果てまで行って殺し合う。インド人の社会へ、暴力と駆け引きで割り込むかと思えば、アメリカの原住民から、国を血で汚した上取り上げるといふ有様、先方では、ヨーロッパ人を、世界のはずれから来て人殺しをした上、仲間同士命を取り合う人道の敵と心得ている」(『ルイ十四世の世紀』第十六章)。

なお、この公証人の息子は八四歳で最後は栄光に包まれて死ぬが、教会に埋葬を拒否されるという波瀾万丈の人生を生きた。だが、彼はなにも単なる投機家や冒険家であったのではない。このまさにフランス的な文人の名誉のために付言すれば、広い意味における「大いなる転換期」ともいえる一八世紀というロマネスクな時代には、彼のような人物は他にもいた。

例えば、『フィガロの結婚』の作者ボーマルシェなども、時計師、外交官、密偵、投機家、政論家、武器商人そして劇作家という多彩な顔をもっており、その生はロカンボレスクであった。この一八世紀フランス・ブルジョワジーを象徴する人物は、アメリカ独立戦争当時、国王から百

万フランもの大金を得て、独立派支援のため武器弾薬を供給したり、イギリスとオーストリアへはフランス政府の密偵として赴いたかと思うと、他方で、劇作家協会を設立してはじめて著作権の確立を目指したり、ケール版のヴォルテールの著作集を編集したりしている。この二人は思想も性格も違うが、いずれも一八世紀フランスの上昇ブルジョワジーを象徴する存在であり、広義のリベラタン（自由思想家）であったのだろう。

ところで、こうした反植民地派はモンテスキューやヴォルテールだけでなく、啓蒙思想のもう一人の代表ルソーをはじめ、デイドロもベルナルダン・ド・サン＝ピエールなど総じて反・新世界の側に立っていた。カナダは、『百科全書』にも僅か数行が割かれているだけだったのである。つまり、このような「文学共和国」の一般的風潮にビュフォンのような博物学的思潮が加わり、相乗効果を伴って新世界論争へと発展していったのだろう。したがって、この論争の背景にはきわめてフランス的な要因が潜んでおり、それは後の「危険な関係」の通底音となっていく根深いものである。

参考文献

- ヴォルテール（高橋安光訳）…『哲学辞典』、法政大学出版局、一九八八年（安斎和雄訳）…『歴史哲学』…『諸国民の風俗と精神について』、法政大学出版局、一九八九年
- （串田孫一他訳）『ヴォルテール、デイドロ、ダランベール』、世界の名著二九、中央公論社、一九七〇年
- （根岸国孝他訳）…『モンテスキュー、ヴォルテール、デイドロ』、筑摩書房、一九六〇年

- （丸山熊雄訳）…『ルイ一四世の世紀』、岩波文庫全四巻、一九七五年（吉村正一郎訳）…『カンディッド』、岩波文庫、一九七五年
- モンテスキュー（根岸国孝訳）…『法の精神』、世界の思想二、『フランス啓蒙思想』所収、河出書房、一九六五年

* * *

- ビュフォン（菅谷暁訳）…『自然の諸時期』、法政大学出版局、一九九四年（ベカエール直美訳）…『ビュフォンの博物誌』、工作舎、一九九二年
- トマス・ジェファソン（中屋健一訳）…『ヴァージニア覚え書』、岩波文庫、二〇〇三年

- デイドロ（小場瀬卓三、平岡昇監修）…『デイドロ著作集』、全四巻、法政大学出版局、一九七六年

* * *

- ゲーテ（菊盛英夫訳）…『ゲーテ全集』、第九、十巻、人文書院、一九六三年
- アンドレ・モーロワ（鈴木福一他訳）…『アメリカ史』、近代文化社、一九四九年

- アルベール・ティボーデ（辰野隆、鈴木信太郎監修）…『フランス文学史』、全三巻、角川文庫、一九六一年

- ミシュレ（桑原武夫他訳）…『フランス革命史』、世界の名著三七、中央公論社、一九六八年

- ヴォルフ・レベニース（小川さくえ訳）…『十八世紀の文人科学者たち』、法政大学出版局、一九九二年

- 松村 超、富田虎男編著…『英米史辞典』、研究社、二〇〇〇年
- 関西学院大学アメリカ研究所編『アメリカ辞典』上巻、雄元社、一九四九年
- その他、フランス紙 Le Monde、週刊誌 L'Express、Le Nouvel Observateur などの特集記事

* * *

- Voltaire : *Essai sur les mœurs*, tome I, II, Classiques Garnier, 1963
- Saint-Simon : *Traité politiques et autres écrits*, Bibliothèque de la Pléiade, 1996
- Buffon : *Pages choisies*, Classiques Larousse, 11e édition
- Gustave Lanson : *Histoire de la littérature française*, Librairie Hachette, 1967
- Pierre Gaxotte : *Le Siècle de Louis XV*, Librairie Arthème Fayard, 1953
: *La Révolution française*, Arthème Fayard, 1938
- Louis Andre : *Louis XIV et L'Europe*, Editions Albin Michel, 1950
- Emile Guyenot : *Les Sciences de la Vie aux XVIIe et XVIIIe siècles*, Editions Albin Michel, 1957
- Louis Reau : *L'Europe française au siècle des Lumières*, Editions Albin Michel, 1951
- Diderot : *Oeuvres philosophiques*, Garnier, 1980
: *Mémoires pour Catherine II*, Garnier, 1966
- Beaumarchis : *Le Barbier de Séville*, Classiques Larousse
: *Le Mariage de Figaro*, Classiques Larousse
- Duc de Castries : *Figaro ou la vie de Beaumarchais*, Hachette, 1972

* * *

- Philippe Roger : *L'Ennemi américain—Généalogie de l'antiaméricanisme français*, Edition du Seuil, 2002
- Guy Sorman : *Made in USA*, Fayard, 2004
- Gilles Havard et Cecile Vidal : *Histoire de L'Amérique française*, Flammarion, 2004

- Bill Marshall / Cristina Johnston : *France and the Americas —Culture, Politics, and History (Transatlantic Relations)*, 3 vols, ABC—Clio, 2005
- Henriette Walter : *Honni soit qui mal y pense*, Robert Laffont, 2001
- Jean-Marie Colombani et Walter Wells : *France—Amérique—dé liaisons dangereuses*, Editions Jacob—Duvernet, 2004
- Daniel Cohen : *La mondialisation et ses ennemis*, Grasset, 2004